

比惠 38

—比恵遺跡群第83次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第855集

2005

福岡市教育委員会

比恵 38

—比恵遺跡群第83次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第855集



遺跡略号 HIE-83
遺跡調査番号 0312

2005

福岡市教育委員会



序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸との人、物、文化の交流が絶え間なく続けられてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれ明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上、注目されているところです。

今回の発掘調査は弥生時代において「奴国」の拠点の一つとして全国の中でも特に繁栄を極めたと考えられている比恵遺跡群に位置しています。比恵遺跡群はこれまでにも青銅器、鉄器をはじめとする数々の遺物や遺構から大陸の先進技術の受容や人々の交流を窺わせ、注目されてきた遺跡です。83次調査では台地際で棟持ち柱を有した特別な建物跡が検出され、弥生時代の集落の構成を知る上で重要な資料を得ることができました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際して協力いただいた大島康弘氏、丸善不動産株式会社、戸田建設株式会社をはじめ関係者各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例 言

1. 本書は福岡市博多区山王一丁目152番地において福岡市教育委員会が2003年度に実施した発掘調査報告書である。
2. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構図面作成、遺構写真撮影は荒牧が行った。
3. 本書に掲載した遺物実図は平川敬治、濱田美紀、相原聰子、荒牧、津喜は大石菜美子、荒牧が行い、荒牧が執筆、編集した。
4. 本書掲載の実測図、写真、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用していく予定である。

凡 例

1. 本書掲載の遺構図方位は国土座標北による。
2. 掲載した遺物は通し番号を付した。

*表紙の題字は安野 良さんによる。

本文目次

Iはじめに	1
1調査に至る経緯	1
2調査の経過	1
3調査体制	1
II位置と環境	2
1立地	2
2層序	2
III調査の記録	2
1. 調査の概要	2
2. 聚穴住居跡	5
(1) SC90	5
(2) SC95	6
(3) SC200	6
3. 土壌	7
(1) SK11	7
(2) SK77	7
(3) SK06	7
4. 掘立柱遺物跡	8
(1) SB01	8
(2) SB02	10
5. 柱穴	10
(1) SP189	10
(2) SP10	10
(3) SP07	11
(4) SP180	11
(5) その他柱穴と出土遺物	12
(6) 不明性格遺構	13
6. 清	14
(1) SD01, 02	14
(2) SD08	15
(3) SD04	15
(4) SD89	15
IVおわりに	16



1 比恵遺跡群 2 那珂造跡群 3 松村遺跡 1/100,000

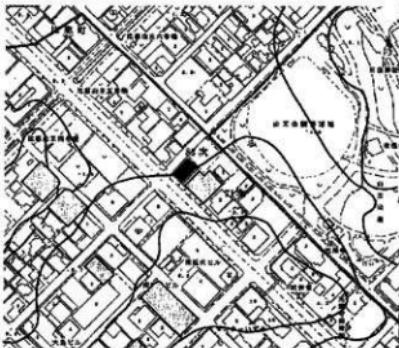


Fig.1 比恵遺跡群

I はじめに

1. 調査に至る経緯

平成15年2月24日、大島康弘氏より福岡市博多区山王一丁目152番地における共同住宅建設計画に伴って「埋蔵文化財の有無について(照会)」の書類が埋蔵文化財課に提出された。これを受けた当課では書類審査を行い、試掘調査を実施した。その結果、調査が必要と判断され、調査期間と費用を提示し、協議を重ね大島康弘氏との間で委託契約を締結した。発掘調査は平成15年5月12日より調査を開始した。調査は約2ヶ月を要し、平成15年7月15日に終了した。

2. 調査の経過

調査区は敷地438m²のほぼ全面に及び、排土の処理も敷地内で処理していく必要があったために、調査予定地を3分割して表土剥ぎを行い、排土の移動をその都度行った。従って、写真撮影は分割したものとなっている。

3. 調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

(調査主体) 福岡市教育委員会 (調査統括) 埋蔵文化財課長(前任) 山崎純男 調査第2係長(前任) 田中寿夫 (庶務) 文化財整備課 御手洗 清 (試掘調査・協議) 事前審査係長(前任) 池崎謙二 担当 久住猛雄 (調査担当) 荒牧宏行 (調査作業員) 内山和子 黒瀬千鶴 武田潤子 松井・美 安高精一 小野千佳 高手興志子 兼田ミヤ子 河野一 甲斐康完 酒井次憲 豊丸秀仁 山上智雄 大賀一 永田八重子 北原由起子 渋谷留雄 濱フミ子 知花繁代 沖政芳 松若俊美 (資料整理) 松下伊都子 小金丸昌世 大石菜美子 相原聰子

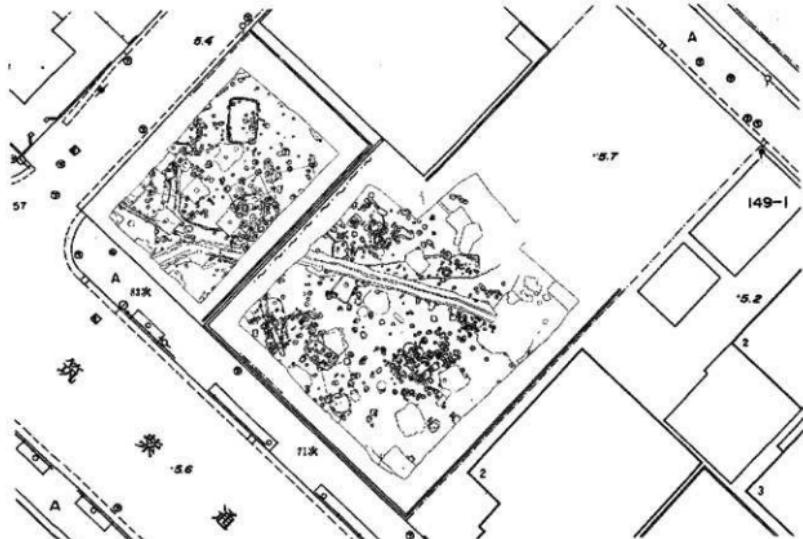


Fig.2 調査区位置図 (1/500)



Ph.1 調査区北東部全景（東から）



Ph.2 調査区南東部全景（西から）



Ph.3 調査区西半部（北東から）

II 位置と環境

1. 立地

調査地点は比恵遺跡群の北東際近くに位置する。東側約50mの山王公園野球場には北西方向に延びる大きな谷地形が入ることが知られているので台地が緩やかに北東方向に下降していくことが予想される。このことは南側隣接地の第71次調査報告からも知られ、遺構密度も薄くなっている。（『比恵30』市報671集2005 p-68、88）

2. 層序

現GLは標高5.8mで平坦に造成されているが、約60cmの客土下、東側では水田土壌が堆積した下層で地山の鳥栖ロームになる。遺構検出面となる鳥栖ロームは調査区南西部の標高4.9mから北東部の標高約4.7mまで約20cmの比高差で傾斜している。調査区の北東辺際では輪郭が不明瞭な包含層と思われる黒色粘質土が層厚5cm位で堆積していた。

III 調査の記録

1. 調査の概要

遺構は東際では急激に少なくなるが、全体的に密度濃く分布する。検出された主な遺構は中世12世紀代と思われる水路、弥生中期の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡2棟、弥生後期～古墳初頭の掘立柱建物跡1棟、土壙2基、溝4条等がある。この中で弥生中期の掘建柱建物跡SB01は棟持柱を有した大型建物の可能性があり、台地際の立地とともに注目される。

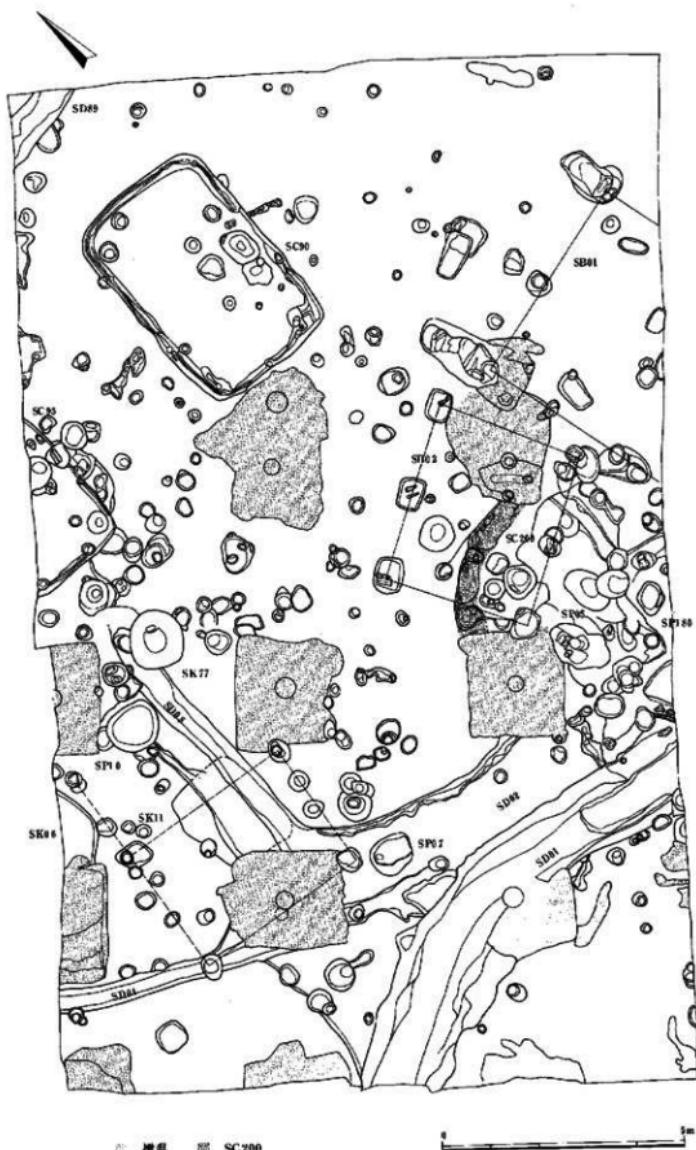


Fig.3 全体造構配置図 (1/100)

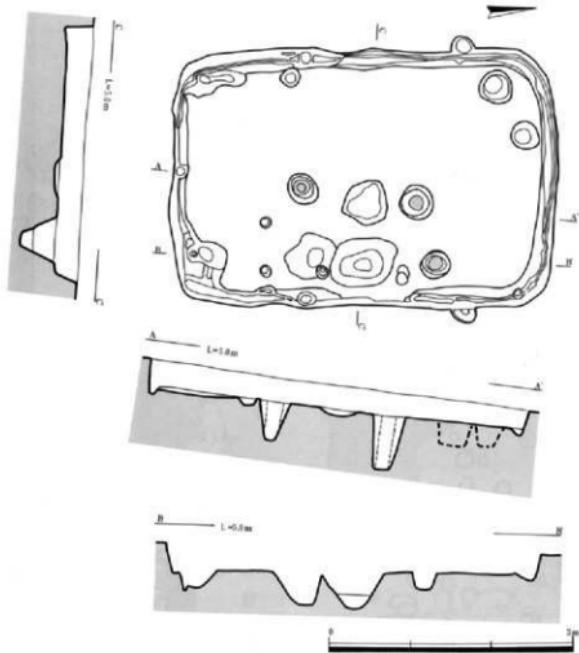
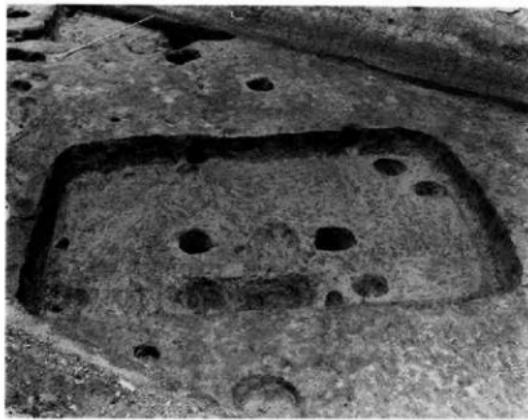


Fig.4 SC90実測図 (1/60)



Ph.4 SC90完掘状況 (東から)

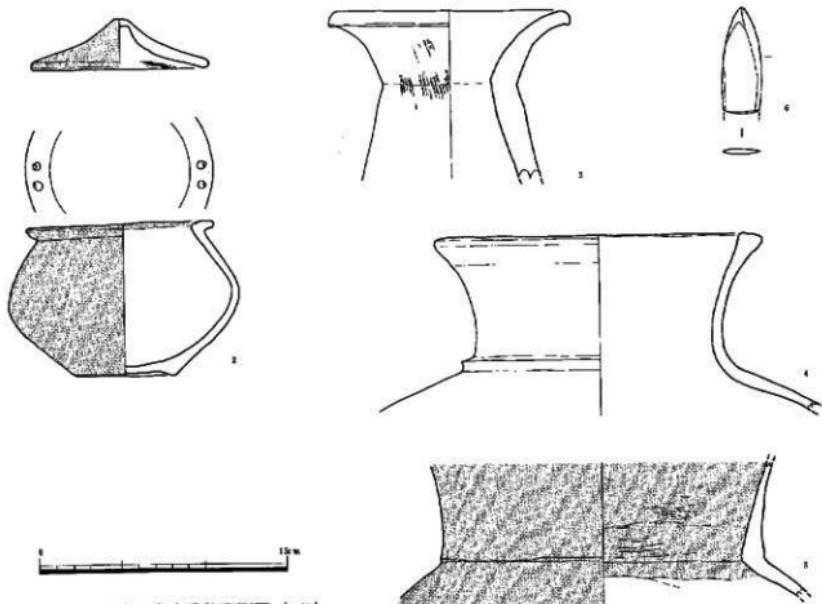


Fig.5 SC90出土遺物実測図 (1/3)

2. 壇穴住居跡

(1) SC90

調査区の北東端でSC95と並列している。主軸方位が真北に近い長方形プランを有す。短辺3.1m、長辺4.7m、壁高30cmを測る。入口部と考えられる東辺中央が途切れている他は全周に壁溝が巡る。この壁溝からは床面検出時に幅約2cmの細い板状の痕跡とみられる黒色土を検出し、貼床土を剥いだ段階で幅15cmの掘り込みを検出した。深さは約10cmで所々に小穴が検出され、留杭とみられる。中央から若干、東側の入口部に寄った位置に径50cm、深さ8cmの浅いビットが検出された。炉と考えられるが、明確な焼土は検出されず、ロームと黒色土ブロックが混じった埋土であった。このビットを挟んで径40cmの主柱穴2本が検出された。主柱穴の柱痕は約20cm、心芯で140cmの柱間がある。東辺中央に60×75cmの楕円形プランをしたビットが検出された。深さ45cmを測り、この位置は壁溝が途切ることからも入口であることは明確である。このビットを挟んで100cmの間隔をとった径15cmの小穴が検出された。入口施設に伴うものと考えられる。その他壁際で検出された柱穴は補助柱として機能したものと考えられるが、中央を境に凡そ対照的に配列されていることは注意される。出土遺物 1は西辺壁溝上から出土した丹塗り磨研の壺蓋である。2も西辺寄りの床面から出土し1とセットとみられる丹塗り磨研の無頭広口壺である。潰れた状態で出土し、ほぼ完形に復元できる。3は埋土上部から出土し、口縁端部が欠落摩耗している。5は埋土中から出土した丹塗り磨研壺。6の磨製石錐は厚み2.4mmを測る。

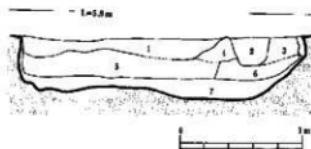
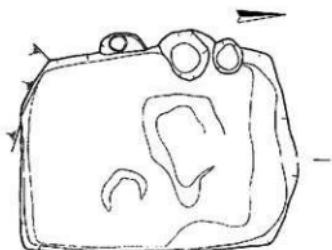


Fig.6 SK11実測図 (1/40)

Fig.7 SK11出土遺物実測図 (1/3)

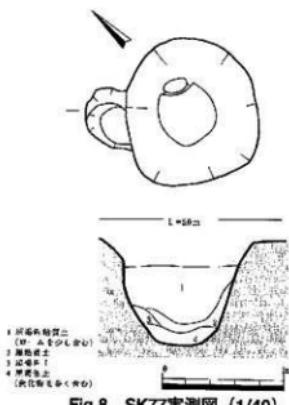


Fig.8 SK77実測図 (1/40)

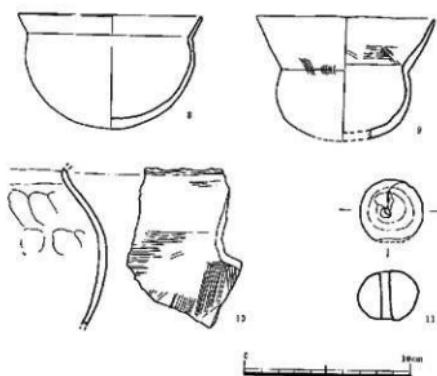


Fig.9 SK77出土遺物実測図 (1/3)

(2) SC95 (Ph.5)

SC90 の西側の調査区で検出された。SC95と並列し、壁溝も東辺で切れることから同様の入口とみられる。

(3) SC200

全体図Fig.2に図示した調査区南辺中央に貼床状の地山の汚れが一部円形に検出され、さらに柱穴が円形に近く配列し集中することから弥生中期の円形竪穴住居跡と判断される。他にSC95周辺と調査区西よりのSD01の分岐点周辺の2箇所に円形竪穴住居跡の可能性がある柱穴群がみられる。第71次調査でも同様に壁が削平され、柱穴のみ検出されたものが存在していた。



Ph.5 SC95発掘状況（北から）



Ph.6 SK11土層断面（北から）



Ph.7 SK06土層断面（南から）

3. 土壌

(1) SK11 (Fig.6、Ph.6)

調査区西側でSD08に切られて検出された。短軸長165cm、長軸長220cmの長方形プランを呈す。深さ30cmで平坦な床面となるが、最下層に貼床土とみられる黒色土ブロック混じりのロームが起伏して堆積している。出土遺物の7は突出した丸底の底部である。

(2) SK77 (Fig.8)

調査区中央の北壁寄りで検出された。径110~120cmの円形プランを呈す。深さ80cmを測り、断面からはレンズ状の堆積がみられ、最下の層厚約10cmに炭化物が多い黒褐色土が堆積していた。出土遺物の6、7は上部から出土した小型丸底壺である。8は器面が剥落し、調整不明。9は成形時のハケメが一部残る。10の土師器壺は横位のハケメが上部に残る。11は土製の丸玉である。径2.5cm、厚さ2.0cm、孔径3mmを測る。

(3) SK06 (Ph.7)

調査区の北西際で検出された。大半が調査区外となり、南側が搅乱を受け破壊されている為、その形状は不明である。深さ約20cm。出土遺物中に弥生中期後半代と思われる器台が含まれる。

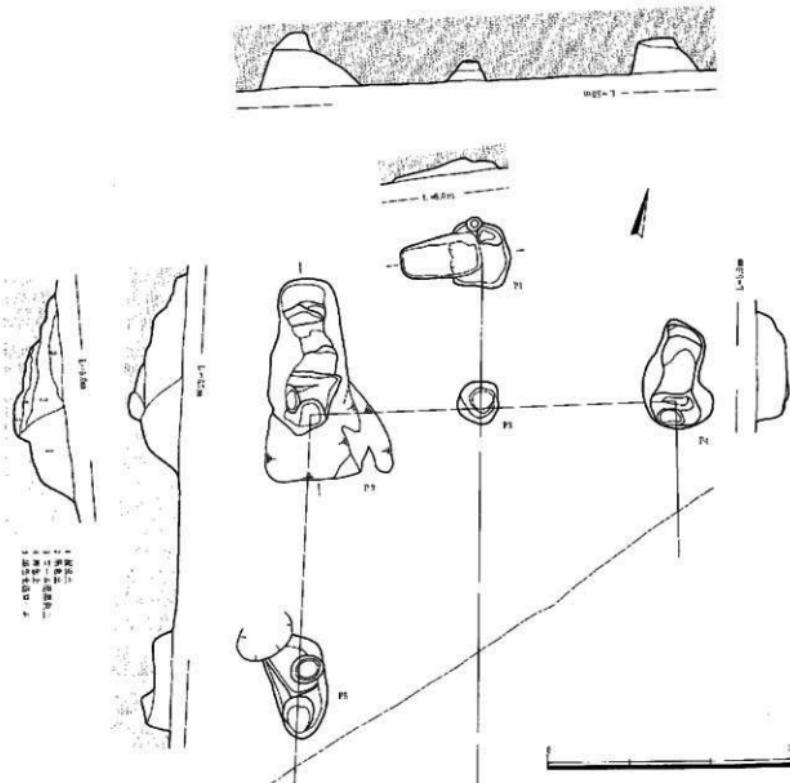


Fig.10 SB01実測図 (1/60)

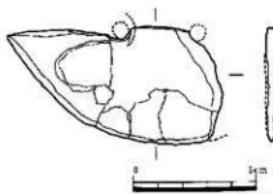


Fig.11 SB01柱穴出土石器 (1/2)

4. 掘立柱建物跡

(1) SB01

遺構が少なくなった調査区東側で検出された。P1、P4は円形の掘方に柱材を抜く為とみられる細長い掘方が切合

う。P2は柱痕付近が搅乱のため破壊されているので不明で

あるが、階段状の掘方は構築時の痕跡を留めている可能性

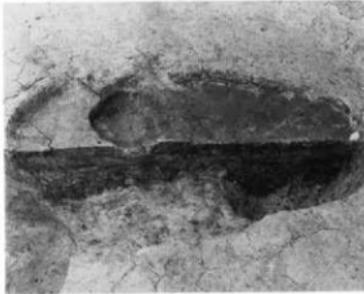
もある。P5の土層断面には柱痕が検出されず、柱材抜き取りの掘方とみられる。下底に残る柱痕から測った柱間の芯心間での距離は梁間のP2～P3、P3～P4間が各210cm、240cm、棟持柱のP1～梁間柱P3が180cmである。桁行のP2～P5間は370cmを測る。柱穴からの遺物は、赤土器の細片が少量出土したにすぎない。出土遺物の12は安山岩製の石包丁である。



Ph.8 SB01検出状況（南から）



Ph.9 SB01-P2土層断面（南西から）



Ph.10 SB01-P5土層断面（北西から）



Ph.11 SB01-P2完掘状況（北西から）



Ph.12 SB01-P4完掘状況（北西から）

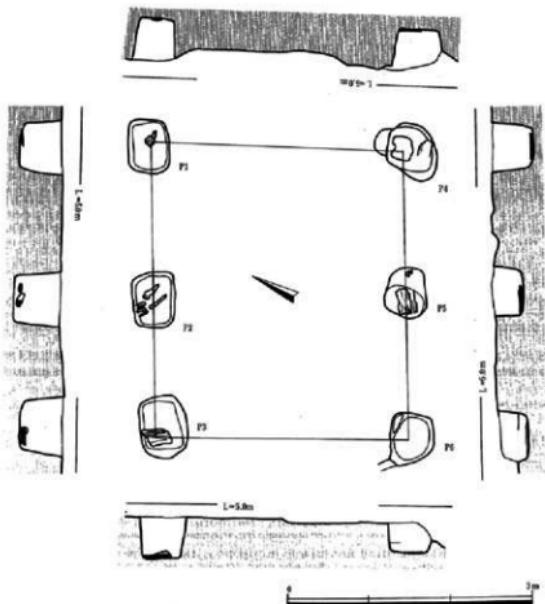
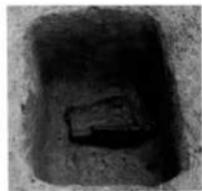
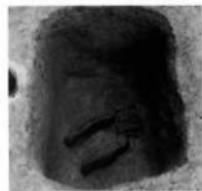


Fig.12 SB02実測図 (1/60)



Ph.13 SB02-P3礎板



Ph.14 SB02-P2礎板



Ph.15 SB02-P4礎板

(2) SB02

調査区中央で検出された1×2間の建物である。棟方向が北東を向き竪穴住居跡やSB01と異なる。梁行310cm、桁行360cmを測る。5個の柱穴に礎板が残る。

5. 柱穴

(1) SP05

調査区中央の南側で検出された。中央に径30cmで下部にかけて窄まる柱痕が検出された。下底の断面は柱痕にむかって階段状に傾斜し、上部の土層は柱痕にむかって流れ込む状況がみられた。柱痕の崩れ方が小さい下部には構築時の痕跡が留められていると考えられる。上部から弥生中期の甕底部が出土した。

(2) SP10

調査区西側で検出された。径100~110cmの円形プランを呈す。北側に傾斜した土層上の中央に柱痕がみられる。高さを調整したものか。15は弥生中期の甕底部、16も弥生中期の甕口縁部である。

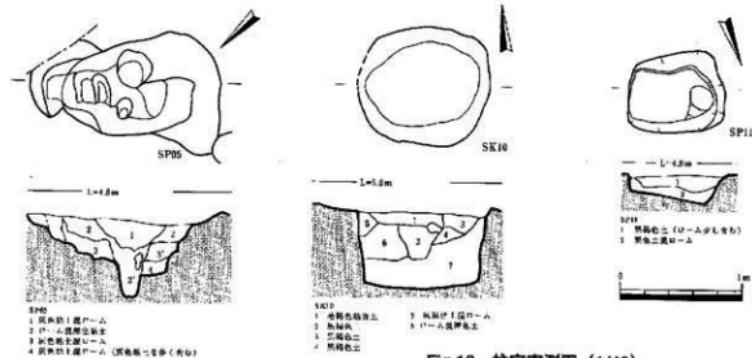


Fig.13 柱穴実測図 (1/40)

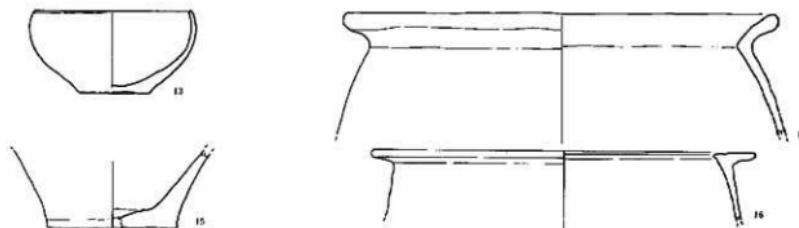


Fig.14 SP189、SP10出土遺物実測図 (1/8)

(3) SP07

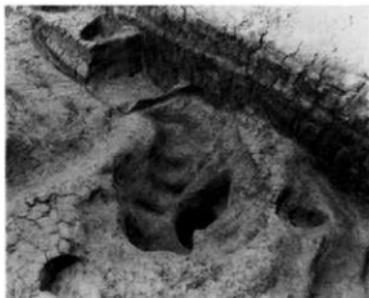
調査区西側で検出された65×80cmの略方形プランの掘方である。下底が南側に傾斜し、土層断面からは柱痕跡は検出できないが、南際の下底から径20cmの柱痕が検出された。

(4) SP180

調査区中央の南際で検出された。56×80cmの菱形に近いプランの掘方である。径26cmの柱痕中から弥生中期の鉢形上器17の完形が出土した。この上器上の一部に白色粘土が掛かっていた。出土遺物の17は火熱を受け淡い赤褐色を呈し、丹塗り磨研と思われる器面が剥落し、外面は成形時の継ぎのハケメがみえる。内面ナデ調整。胎土に赤色紋を多く含む。



Ph.16 SP05土層断面（南西から）



Ph.17 SP05先端状況（南東から）

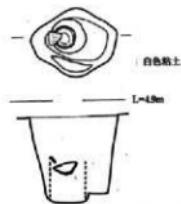


Fig.15 SP180実測図（1/40）



Ph.18 SP180検出（南西から）

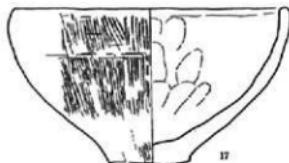


Fig.16 SP180出土遺物実測図（1/3）



Ph.19 SP189内壁検出

(5) その他柱穴と出土遺物

Ph.19のSP189はSP180に近接した柱穴であるが、中央に拳大の石が置かれていた。出土遺物13の弥生中期後半の鉢は器面が剥落し調整不明。14は壺口縁部である。SP01のP5を切った柱穴は礎板に30cm大の平石を用いている。中世まで降る可能性がある。Fig.17で示した柱穴出土の土器は弥生中期後半から後半代に属している。石製品の26は滑石製の錘である。紡錘形を呈し、十字に紐掛けの

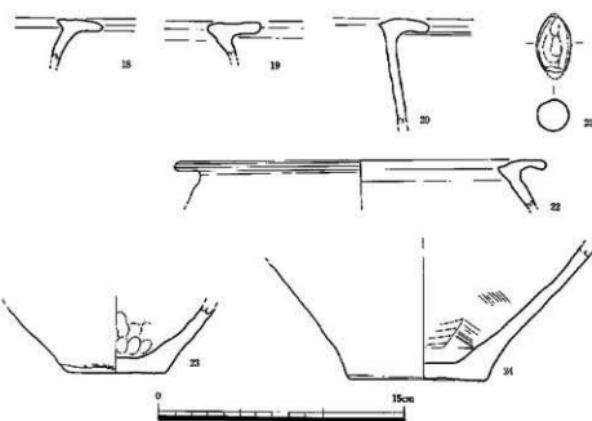


Fig.17 柱穴出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

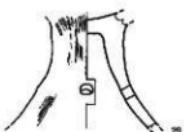


Fig.18 SX91出土遺物実測図 (1/3)

溝を穿つ。長軸長4.50cmを測る。27も石錐とみられ、小型の長方形体に十字の縦掛けの溝がある。長軸長3.4cm、頁岩製。28は未製品ともみられ長方形体に加工したものが折れている。粘板岩製。

(6) 不明性格遺構 (SX91)

高査区北端のSC90周辺に黒色粘質土が堆積していた。明確な輪郭は無く、包含層の可能性がある。出土遺物の29は古墳初頭の土師器高坏と思われる。

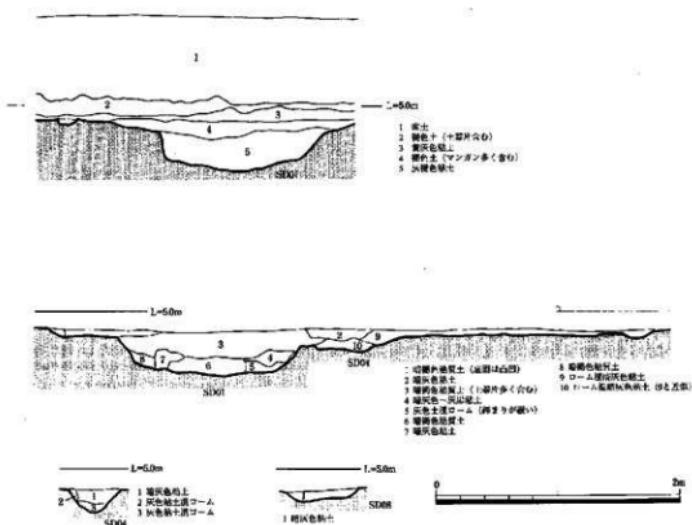


Fig.19 SD01、04、08土層断面図 (1/40)

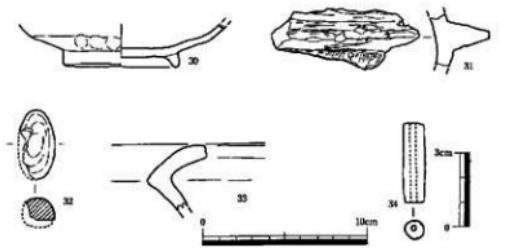


Fig.20 SD01、08出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

り込みで、一連のものとすれば、2段掘り状となる。SD01は幅150cm、深さ35cm、SD02は幅150cm、深さ5cmで縦に幅約20cm、深さ6cm程度の起伏が大きい攪拌されたような溝状の流路が検出された。

出土遺物

30～34はSD01出土である。30の土師器碗は火熱を受け器面が剥落し粘土が融解している。31は滑石製石鍋、32は土製の投弾、33は弥生後期頭の壺口縁部である。

(2) SD08

SD02と接続し、幅120cmで浅い2段掘りの形状をなす。最深でも約8cm程度である。出土遺物の34は碧玉製管玉である。

6. 溝

(1) SD01, 02

調査区西側で検出された。第71次調査のSD01の延長である。調査区西辺近くで大きく西へ折れ、その位置で北側へ延長したSD08と直進していくSD04の支線水路に分岐する。

SD02はSD01と平行する浅い掘



Ph.20 SD01、02、04、08発掘状況（北東から）



Ph.21 SD01、04水口土層断面（東から）



Ph.22 SD08土層断面（南から）



Ph.23 SD04土層断面（南東から）

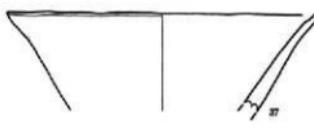
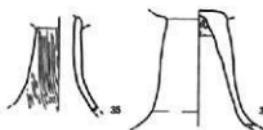


Fig.21 SD89出土遺物実測図（1/3）

(3) SD04

SD01と接続し、取水口と考えられる部分は攪拌されたように広がる。幅40cm、深さ17cmを測る。

(5) SD89

調査区北東界で検出された。略東西に延長し、幅70cm、深さ約10cmを測る。出土遺物の35高環脚部の外面にはハケメが残り、36の高環脚部はやや湾曲したエンタシス状となっている。37は壺口縁部とみられ、古墳初頭の時期か。

IV おわりに

全体を通して、遺物は弥生中期後半から後期初頭の時期と古墳初頭の時期のものが多く見受けられる。並列したSC90とSC95は弥生中期末の堅穴住居跡と考えられ、棟の方向が近似するSB01も近い時期と考えられる。SB01は棟持柱を有した特別な掘立柱建物とみられ、柱の掘り抜きからみても相当規模であったことが判るが、残念ながら調査区外のため、全体は不明である。SB01周辺は造構が極めて希薄となり、台地際の集落線辺部に位置している可能性がある。構造とともに立地も注目される。

比恵遺跡群が立地する台地は東側約50mの山王公園野球場内まで延び、そこから崖状に埋没谷におちていく。(Fig.1) 2004年度の山王1次調査でこの谷を調査中である。83次調査地点とこの埋没谷の間、おそらく、83次調査地点の東際近くに古代官道が推定される。確認されている官道側溝周辺の造構は極めて希薄となり、地山も軟弱となってくる。本調査地点で検出された鐵板を設けたSB02もその変化に適応させたものと思われる。

古墳初頭の時期はSD89、SB02、SK11、77等の土壙が考えられる。那珂、比恵の台地部に略南北の平行した2条の溝が検出されてきている。古墳初頭の時期が考えられ、その形状から道路の存在が推測されている。SD89はわずかに一部であるが、東西方向に延長した近い時期の溝として留意される。

中世の造構では幹線水路SD01から分岐した04、08の支線水路を含め、これらは12世紀代の掘削と思われる。上記の台地際の官道周辺では12世紀代遺物が見受けられ、同時期に新たな開発が進んでいったことを示している。今回検出された水路もこのような新田開発のような活動とともにになっている可能性がある。

報告書抄録

書名ふりがな	ひえ
書名	比恵 38
副書名	比恵遺跡群第83次調査報告
巻次	38
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第855集
編著者名	荒牧宏行
発行機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667
発行年月日	2005年(平成17年)3月31日
遺跡名ふりがな	ひえいせきぐん
所取遺跡名	比恵遺跡群
所在地ふりがな	ふくおかしはかたくさんのう
所在地	福岡市博多区玉山1丁目152番
市町村コード	130
遺跡番号	0127
北緯	33°34'55"
東経	130°25'48"
調査期間	2003.05.12~2003.07.15
調査面積	273m ²
調査原因	共同住宅建設
種別	集落
主な時代	弥生中期後半 古墳初期 中世(12世紀)
主な遺構	堅穴住居跡2軒、掘立柱建物跡2棟、水路3条
主な遺物	土師器 須恵器
特記事項	台地際に弥生中期とみられる櫛持柱を有した建物跡が検出された。

比 恵 38

—比恵遺跡群第83次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第855集

2005年3月31日

発行 福岡市教育委員会

(福岡市中央区天神1-8-1)

印刷 博多印刷株式会社

(福岡市博多区須崎町8-5)

